

今年の種苗生産では水作り・残餌密度計数・投餌量計算・水槽底掃除・換水率調節・ワムシ及びア
ルテミアの栄養強化・初期配合飼料投餌を省略し作業量を軽減させた。

【残された問題点】

沖縄県栽培漁業センターのカニ種苗生産施設の屋根は大部分をコンクリートスレートで覆われ、飼
育水槽の照度は晴天時で10,000ルクス以下であった。今年、劣化した透明スレートの一部交換し照
度を50,000ルクスまで増加させた。本土のカニ種苗生産施設は屋外あるいは全面透明スレートに覆
われ太陽光透過率の高い施設である。当センターの施設も将来的には全面透明スレートに交換してい
くのが望ましい。

今年は種苗生産方法を変え種苗生産期間、作業量等を軽減させることができた。しかし、幼生収容
から放流稚ガニ取り上げまでは連日投餌作業が必要である。今後は自動給餌機の導入、数日間の無投
餌飼育等により更に作業量の軽減を目指す必要がある。

カニ類は放流群を天然群と区別する標識放流が難しいため、天然稚ガニの出現以前に種苗を放つ必
要がある。そのためには早期の種苗生産を行なう必要がある。

II 中間育成

【目的】

中間育成により放流種苗（C3～4）を20万尾生産する。

【方法】

種苗生産水槽から取り上げた稚ガニをカニ種苗生産施設の50・100m³水槽に収容し約2週間の中間
育成を行った。

餌料にはアサリ・オキアミのミンチとクルマエビ用の配合飼料（5～7号）を給餌した。

稚ガニのシェルターとしてサンゴ砂を水底に約5mmの深さに入れ、その上にキンラン・ノリ網を水
平あるいは垂直に設置した。

【結果】

合計5回の中間育成により46万尾の放流種苗（C3～C6）を生産した（表2）。